
レジナレス・ワールド

新羅三郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジナレス・ワールド

【Nコード】

N7503Y

【作者名】

新羅三郎

【あらすじ】

強くてニューワールド。VRMMO「レジナレス・ワールド」プレイ中に起こった不幸な局所現象。巻き込まれた2名の男女に、ただ一度の「機会」が提供される。それは、彼らのために与えられた新たな世界で暮らすこと。責めてものお詫びに、と、直前までのゲームのノウハウとステータスを、一部だけ引き継いで。

「うん」

はるか地平線が春の陽気にかすんでいる。そこにさわやかな風が渡っていく。

そよぐ風が美しい新緑の草を揺らし、彼の頬ほほをくすぐった。

気持ちよさとくすぐったさに目覚めると、隣から、同じような声を上げる女性の声が聞こえ、たのなかしゅう田野中修の意識は、一気に覚醒する。

寝ころんだまま横を見ると、そこには、良く見知った美しい女性の顔があつた。

「あれ？サラさん？」

「ん…シユウくん？」

シユウの家の一階上、同じマンションの住人である。シユウより2こ上の二十歳。

美しいナチュラルウェーブのあわい金髪は、普段は無造作に束ねられているが、降ろすと腰まであるほどに長い。今はなぜか降ろしている。

瞳は透き通るように美しいブルー。光の加減で美しく変化し、見るものを魅了してやまない。

北欧系の大柄で整った肉体。

日本人の男の眼を釘付けにするほどの大きさを誇る美しく形の良
い胸、その下になだらかなカーブでくびれていく腰と、そこからふ
くらんでいく発達した骨盤にあわせた肉付きは、彼女の造形を一目
見ただけですべての男に強烈に印象づける。

それでいて年齢がわかりにくいほどあどけない表情をするので、
整いすぎた彫りの深い美しい顔なのに、少しも冷たい印象を与えな
い。

本業のモデルであるふたつ上の彼女の姉のユリアは、普段から冷

静で無表情で、さらに整った容姿と美貌を誇っているため、一種近寄りがたい偉容だが、サラは、豊かな表情がとても魅力的で、シユウにとつては、サラのほうがより異性として惹かれるタイプだった。

二人は、草の上で仰向けの姿勢で顔だけ動かしお互いの姿を確認し、それぞれひじで上半身を起こしあげる。

サラの眼が、シユウの顔から、すっと下半身のほうに流れる。

その目線に応じてシユウも、自分の下半身に。

「きゃっ！」

サラが思わず悲鳴を上げる。それはほんの小さな悲鳴だったが、シユウの意識を一瞬で沸騰させるに充分だった。

「なっ…！えっ！えっ？」

何一つ身につけていない生まれのままの姿。目覚めの瞬間の男性特有のあの状態になっていなかったのは幸か不幸か？

シユウは飛び起き、いわゆる体育座りで股間を隠し、両手で出来るだけいろんな物を見えないようにガードしてみた。

そして、固まってるサラをみる。

顔から、胸、そして……。

青ざめたシユウの顔がみるみる赤く染まっていく。

その視線に気がついたサラが自分の姿に気づく。

「あ……っ、ごめっ」

「いやっ！」

とっさに左手で胸を隠そうとするサラ。だが、胸に巻き付けた左手が、サラの大きすぎる胸の形を複雑に変えることで、むしろ男にとつては『眼に毒』な事になっていく。

「さて」

ほぼパニック状態と言つていい二人の精神に冷や水を浴びせるほ

どに冷静な、だが威厳に満ちた男性の声が、二人の正面から発せられたことで、この、不可解で、あり得ない状況に変化が生まれた。

「田野中修、サーラ・ヨハンセン。落ち着いたかね？」

二人の目の前に、青白く光る直径5cm くらいのガラス玉のようなものが浮かんでいる。

そして、どうやらそれが「しゃべって」「いるらしい。」

その声は、どうもある程度年配の、男性のような響きだった。

「まず、二人に詫びねばならぬ事がある」

それは、存在するだけで二人に威圧感を与え、興奮を沈静化させるに充分だったが、その詫びの言葉がきっかけになって、二人はやっと硬直から解き放たれた形になった。

「君たちは、今ここで目覚める直前、何をしていたか覚えているだろうか？」

「…ゲームを、してたと思います」

とまどいながらシユウは答えた。眼をあわすと、サラも小さくうなずいた。

VRMMO。21世紀中頃に急速に発展したヴァーチャルリアリティ技術を応用した体感型仮想現実装置をつかって、オンラインでプレイできるロールプレイングゲームの一種。

神経パルスを模倣することで、ある一定のレベルまでは五感をだまし、プレイヤーによりリアルな娯楽を提供するそのゲームは、急速な普及によってコストが下がると同時に、かつてない規模の市場を形成していった。

意外にもお互いが知らなかったが、二人は、『レジナレス・ワールド』というMMOに参加しているプレイヤーだった。

「そうだ。二人とも、感覚的には、つい今しがたまで、自分の部屋でゲームをしていたと感じておるであろう?」

二人は小さくうなづく。

「君たちは、意識を失った瞬間に、事故にあった　我々のミスで」

要を得ない説明を総合すると、シユウとサラは、なんらかの理由でこの世界に『存在』することになってしまったようだ。

その理由も、意味も全くわからない。何を聞いても、この目の前の玉は、詫びるばかりで理由をいわない。

ただ、この世界はレジナレス・ワールドに違いなく、そして、二人はここに存在すること。そして、元のレジナレス・ワールドと違い、ログインしているVRマシンはないことはわかった。

「私たちの装備はどうなったんですか?」

サラが尋ねる。さすがに、全く意味もわからない上、丸裸にされ、なにも荷物も無しにこの世界に放り出されれば。もし、レジナレス・ワールドの中というのなら、一晩で命はないだろう。

「ああ、すまない。君たちの荷物は、概念上の　ステータスとあったか?その中にすべて収められている」

二人は、それまでプレイでやっていたように、ステータスを開いてみる　あった。

だが、あったのはアイテムガジェットのみで、ステータスパラメータや、装備画面は見あたらない。

「これ、どうやって装備するんですか?」

シユウは尋ねてみた。

「取り出して、自分たちで着用してくれ」

「へえ、リアルですねえ」

シユウは、視点移動でアイテムを選択し、取り出してみた。

とまれ。

目の前に、選択した装備

侍の羽織袴が現れた。

ふわり、と目の前に浮かび上がり、手に取った瞬間、ずしり、と重さが加わる。なかなか便利なものだ。

同じように、草履・刀と、アクセサリであるすばやさの指輪と陣笠を選び、早速着替えてみた。

何となく見てはいけないような気がして反らしていた視線をサラに向け、ちらっと盗み見る。

ほっとするような、残念なようなところだが、サラはすっかり、美しい白銀のプレートメイルにブーツ、そしてふた振りのレイピアを腰に佩いていた。

シユウと視線が合うと、ちょっと照れたようにはにかんだサラ。それを見て、また真っ赤になってうつむくシユウ。

「ところで、ステータスがきちんと機能していないようですか？」
サラが光の玉に尋ねてみた。

「そうだ、残念ながら、この世界は、厳密にはゲームではない」
光の玉は、とんでもないことをいいだした。

「君たちは、この世界で、今まで過ごしたように生きていけるだろう。だが」

光の玉は、また衝撃的な事実を伝えた。

つまり、この世界は、二人にとって現実そのものであり、パラメータなどで計ったり見たりすることの出来ない「リアル」であると。「君たちの『死』は、そのままの命の終焉だ。そして、君たちが何かの命を奪えば、それらもまた、『死』を迎えるであろう。これはゲームではなく、復活点などもない」

「そ、そんな！」

「その事実を知っているのは、この世界では君たちのみだ。我々は、この世界を守り、維持はするが、手出しはしない」

「冗談じゃない！あんたらのミスだろ。俺たちがなにしたらってんだよー！」

「そつだ、我々のミスだ。そして、我々に出来る、これがすべてだ。後は君たちに任せよう」

「お、おいつ！」

目の前の光の玉が徐々に薄れていく。

「時間が来た。君たちの行く末に、幸多からんことを……」

唐突に消えた光の玉が去ったあと、二人はしばし呆然と草原に座り込んでいた。

全く意味がわからない。

ほんの一瞬前、プレイ中だった二人は、目の前が暗くなったと思ったら、すでに全裸でここに横たわっていた。少なくとも、そうとしかいいようがない。

「ステータス」

シユンはふと思いついて、ゲームシステムの確認を試みた。みた。みた。

やはり、ステータスにはアイテムガジェットしか存在しない。

アイテムをすつと確認していくと、なぜだか一番下に、金貨や銀貨が入っている。

これもあり得なかった。

所持金は普通、個人ステータスの上部に表示されている。

その個人ステータスが存在しない。

「システム」

環境設定やログアウトを管理するガジェットを呼び出そうとした。

しかし、全く無反応だ。

「サラさん、どうです？」

シユンは、サラにも同じ事やってみてもらった。

だがやはり、お互い何をやっても、開くのはアイテムガジェットだけのようだ。

後々、このアイテムガジェットと中身だけでも、この世界では大変な恩恵だったと気がつくのだが、まだ、この混乱の中の二人にとっては、それどころではなかった。

一通り試すことを試し終わると、二人は草原に並んで腰掛け、また呆然と空を眺めていた。

風はひどく心地いい。

若草を揺らしながら、風はなだらかな草原を駆け下りていく。

ふと見上げると、うすい白い雲が、奇妙なほど速く流れていく。

(こんな状況じゃなかったら、本当に最高なんだけどな)

シユンは、そう思いつつ、ちらつとサラを見てみた。

そのシユンの仕草を感じ、サラは、ついに耐えかねて泣き始めた。

「うっ…うっ、ふっ」

訳のわからない不安さ。だが、この感覚は　　すくなくとも、

この五感に感じる生々しい現実感は、二人がここに放り出された事実をなにより雄弁に肯定している。

ふとシユンは、先ほどの光の玉のように、サラまですつと消えてしまうような恐怖感と孤独感に襲われて、泣いているサラの頭を抱き寄せた。

ほんの一瞬、驚いたようにシユンの顔を見上げたサラは、今度は自分の意志でもう一度シユンの胸に顔を埋め、声を殺し、肩をふるわせて泣いた。

「さて、ごめんなさい」

サラの顔は腫れ上がってひどいものだったが、しばらくするとだいぶ落ち着いていたのか、『えへっ』とした表情を作ると、シユンの体から身を起こした。

「ところでシユン君、レジナレスやってたのね」

「サラさんこそ。意外ですねー」

幼なじみというほどでもないが、お互い、同じマンシヨンの上下階室ということもあり、家族ぐるみで見知った仲ではある。

今どきの男の子であるシユンがゲームにハマるのはともかく、サ

ラは、これほどの美貌の女子大生だ。正直、あまり熱心にゲームにこだわるようには思えなかったので、意外な一面を見た気がする。

「うん、学校の、友達がね、すごい娘こがいるの」

サラは、仲の良い同級生に誘われて、興味半分にはじめたらしい。そこで、その友達と一緒に行動するうち、みるみるうちにレベルは上がり、装備は整い、そして、ゲームの要領をつかんでいくと、あっという間に頭角を現していったようだ。

つまり、

「ハマっちゃったんですね」

くすりとシユンが笑うと、サラは、むーっと頬をふくらませた。

「シユン君は？」

「俺も似たようなもんですよ」

シユンも同級生にかなり熱心に勧められた。

まあやつぱり、評判の高いゲームだったし、シユンも人並みに興味があった。

VRは、意外なツテを持つ父親が買ってきてくれた。

兄は大学進学で一人暮らしをはじめたので、シユンは部屋にVRを設置してもらい、レジナレス・ワールドにどっぷりはまりこんでいた。

「ところで、その格好、聖騎士ですか？」

「うん。二つ名もあつたんだよ」

「えっ、それは……すごいですね」

女の聖騎士で二つ名。何となくぴんと来たシユンは、

「もしかして、舞姫ですか？」

即座に浮かんだその名を聞いてみた。

「えー、なんでわかるの？」

照れくさそうに、サラははにかんだ。

「いわれてみればサラさんのイメージですし……僕にも二つ名あつたんですよ」

サラにいうと

「ちょっと待ってちょっと待って。当てるっ」
サラは眼を輝かせながら、シユンの顔をのぞき込んだ。
こんな状況なのに、シユンはその表情にかなりうるたえた。

「黒竜殺し？」

「よくわかりましたねー」

「シユン君の今の格好」

「ああ」

ゲーム上ではお互い、分身を使っているから、ここでこうして名乗りあわなければ、まず知るよしもなかっただろう。

ちなみに二つ名は、特定のクエスト一番乗りの証であり、その中でも、止めを刺すなどのフラグで獲得するものだけに、強さだけでなく、チーム力や運も関わるトロフィーになっている。

舞姫は、都市を襲うモンスターの大量のイベント時に、最も大量のキルを獲得した一人に贈られたはずだった。女性なので「舞姫」。剣舞のことだ。

黒竜殺しは、その名の通り、ブラックドラゴンスレイヤーに贈られたトロフィーだ。

ドロップは、所属チーム　ギルド単位で受け取れるが、二つ名の称号は、一人に限ることが多い。

黒竜殺しは、止めを刺したプレイヤー限定。だからずいぶんやっかまれたり、からかわれたりしたものだっただけ。

シユンがレジナレス・ワールドにハマれたのは、試験休みから夏休みにかけての期間だった。

さすがに2学期が始まると、それまでのようなギルドチーム前衛でフル稼働、とも行かず、やむなくジョブチェンジをして、わずかな時間に『生産職』を楽しむスタイルに切り替えた。

一応、エスカレーターで進学が決まったシユンだったが、2学期の

成績も無視できないため、春まで廃人プレイはお預けだったのだ。

一方、舞姫は、ほんの一週間くらい前だったはずだ。そう尋ねると、サラは自慢げに胸を張った。

「イルスヴァニア防衛戦よ」

「すごいですね」

シユンも噂は聞いていた。

トップギルドのひとつ「光の楯」が、街に向かって突進する魔物の群れに呐喊して、魔物撃滅の橋頭堡になったという。

その中でも、舞姫は桁違いのキル数を稼ぎ、運営表彰の形で名前が付けられたという。

「もちろん、ギルドの力だけだね」

サラはいうが、そうではないだろう、それだけじゃないのはシユンには手に取るようにわかった。

こんな雑談でも、二人の心は、なんとか動き出せるほどには軽くなかった。

「サラさん、ちょっと動いてみましょうか？」

「そうね、状況もわからないし、出来たら、街を探したい」

お互い、同じ懸念を抱いていたようで、ほっとする。

さすがにこの状況。もしここがレジナレスだとしたら、二人つきりで野宿は、どうしても避けたいところだ。

立ち上がったシユンは、サラに手を伸ばす。

自然な振る舞いでその手を取って立ち上がると、サラは、またはにかみながら

「ありがとう」

とシユンにいった。

とりあえず二人はあたりを見渡す。

まず今の位置に心当たりはあるのか？

「シユン君、ここ、見覚えある？」

「いいえ、来たことない気がします」

なだらかな斜面になっていいる草原、太陽の位置から考えると、斜面は北から南に向かって下っていて、反対側には森がある。

さすがに状況がわからない段階で、森にはいるのは避けたいので、とりあえず、下ってみよう、ということになり、二人は歩き出す。

今見えている地平線は、おそらく5km ほど先だろう。5km ということは、あそこまで行くのに1時間半くらいかかることになるか。

シユンは大まかに計算した。

「どうして僕が『黒竜殺し』だってわかったんですか？」

沈黙を恐れるように、二人は歩きながらとりとめもなく話す。

「だって、黒衣の『侍』でしょ？」

「ああ、なるほど」

二つ名持ちは、正式サービス開始から3ヶ月で、20人くらいだろうか。

大体ジョブによって格好が決まってくるし、それぞれ好みの色があるので、そういった情報は掲示板などでわざわざ話になっていたりする。

「それにしてもサラさん、その格好似合ってますねー」

シユンは、横に並ぶサラに心からそういった。

サラはシユンより頭ひとつ以上長身だ。

そして、足も長い。シユンの腰近くにサラの股の付け根があり、微妙にシユンの劣等感を刺激する。

「ふふ、ありがとう。シユン君も似合ってるよ、侍」

「ええー？そうですかねえ」

シユンは自信がない。まあ普段袴など穿かないので何となく落ち着かないのだが、そういうええはずつとゲームでは袴だったな、と思うと、さほど違和感もなくなってくるから不思議だ。

履き慣れないといえば、足袋と草履のほうがやはりまだ馴染まない。

「いつそ、靴にしようかなあ」

シユンが愚痴ると

「ええー、ダメよー」

サラがなぜかニコニコしながら不満を漏らす。

「だって、すぐくサマになってるよシユン君」

「歩きにくいし、地面平らじゃないから時々痛いんですよ。ごめんなさい、やっぱり靴にします」

「ぶっ」

サラがかわいくふくれるのを見て、シユンは苦笑しながら、ステータスを開き靴を選択する。

移動力補正のある靴はレジナレスでも人気のアイテムで、シユンもちゃんとアイテムにストックしてあるのだ。

履き替えて歩き出す。最初は単に歩きやすくなっただけかと思っただけだ

「サラさん、早足の靴持ってます？」

「あるよ？」

「ちよつと履き替えてもらえます？」

サラにも履いてもらい、様子を見る。

「うわ、これ効果あるわね……」

そうなのだ。どうやら、魔法効果の装備品は、はっきりそれと体感できるほど効果がある事がわかった。

「ほんの気持ちですけど、楽になりましたよね」

「そうね。でもそうしたら、ネックレスとかピアスとか指輪とかも、ちゃんと装備した方がよさそうよね」

サラがふつと漏らし、憂鬱そうに顔を曇らせる。

そう近くない先に、遭遇するだろう、魔物との戦いを思い、気が重くなっているのだろう。

「そうですね、ちょっとこの辺で、装備をちゃんと見直しましょう」
二人は立ち止まり、アイテムを漁ることにした。

二人の所持品をあわせると、現時点で最適と思われるのは、ステータス異常回避の指輪、ゲーム内では防御力+10だった護りの指輪。魔法回避のネックレスなどが効果的だろうと思えた。

また、シюнにはないがサラはピアス穴があるので、耳に魔力増強のピアスを付けた。

腕輪のたぐいも、素早さが上がる腕輪を両腕にはめた。

また、武器防具のたぐいも見直してみた。

シюнは、侍クラスだった頃のベスト装備だったが、サラは、聖騎士の重装備である両手剣を使用するので、レイピアをしまい、現時点で持つ最高の剣、ドラゴンスレイヤーを左腰に佩いた。

さらに、炎属性のナイフを、右の尻あたりに邪魔にならないように下げた。

ちなみに、シюнの装備する日本刀は、無銘ではあるが、炎属性+3が付与されている。脇差にも、風+3という贅沢なものだ。

装備を調べて、二人はあらためて南下を再開する。

2時間ほど歩いただろうか、行く手に川が見えてきた。そして、舗装されてこそいないが、道も発見できた。

特に根拠はないが、シюнが

「川上より川下のほうが街の規模も大きそう」

というと、サラも

「なるほど」

と妙に納得してうなずいていた。

そこで、二人は川沿いの道を東に下ることにした。

疲労はさほどでもないが、さすがに無飲無食のまじへくわすで半日近く歩いているので、二人はバテはじめてきた。

「ポーションでも飲んでみますか？」

「飲む！」

予想以上にひどい味がした回復薬を飲むと、何ともひどい顔を見合わせ、なぜか二人してしばらく笑った。

そうして再び、舗装されていない荒れた道を連れ立って歩いていると、遠くにぼんやり、人工物らしき姿が見え始めた。

人の暮らしの気配を感じるというのは、どうしてこうも安心感があるのだろうか。

だが、旅というのは、ほっとした頃、というのが、なぜだか悪いことが起こりやすい気がする。

村のほど近く、ちょっと先に馬車が見えたところ、何かその馬車の周囲でただことならない気配を感じ、二人は駆け出した。

二人の男が、馬車の左右に別れて、黒い何かと戦っている。

御者らしき男は地面に倒れ、動かない。

二人が幌をかけられた商人用の馬車から離れようとしなないということは、中の様子はわからないが、おそらく誰かが乗っているのだらう。

「ゴブリン！」

一体一体の戦闘力はさほどでもないが、守る二人の男に対し、ゴブリンは40体ほどで攻めては引き、また攻める。

数で押す波状攻撃に、男たちは翻弄され、ひどく疲労しているように見える。

装備からすると傭兵か、冒険者か。

一人一人はさほどなまくらには見えないが、とにかく数が多い上、御者をやられて逃げるに逃げられないらしい。

シユンとサラは、それぞれの獲物を抜いて左右に別れて斬りかかった。

早足の靴の効果か、通常では考えられないほどあっという間に現場にたどり着く。

「フンっ！」

およそ普段とはかけ離れた裂帛の気合いを放ちながら、サラは両手大型剣のドラゴンスレイヤーを横薙ぎに一閃する。

鈍く黒い色に光るそれは、一振りですべてのゴブリンを両断し、激しい血しぶきを周囲に散らしていく。

シユンも、素早い身のこなしから抜き身の日本刀を縦横に振り抜き、あっという間に7匹のゴブリンを斬り伏せている。

思わぬ援軍に一瞬あつげにとられた警護の男たちも、すぐに状況を悟ると、ゴブリンに伐って出ていった。

ほんの一瞬で攻守が逆転したのを悟ると、あつけないほど潔く、ゴブリンたちは逃走を始めた。

生まれて初めて体験する血と臓物のひどい悪臭の中、シユンとサラは、こみ上げる吐き気をこらえ真つ青な顔をしながらも、襲われていた男たちのほうへ戻った。

黒い出で立ちのシユンはまだしも、白銀のプレートアーマーに白い肌をしたサラは、返り血を浴びてすさまじい外見になっている。

その様子は、助けられた男たちでさえ言葉を失い、ややもすると

彼らさえ怯えさせているように見える。

「大丈夫ですか？」

シユンが声をかけると、呪いから解かれたかのように男たちは生気を取り戻した。

「あ、ああ。助かった、感謝する」

「サラさん、その人見てやってください」

道に伏せたまま動かない御者を差しシユンがいうと

「あ、うん……」

まだ右手に血まみれの剣を握ったまま呆然としたサラは、のろのろと倒れた男に顔を向けた。

これはダメだな。シユンはサラをみて直感した。

「すいませんが、その人お願いできますか？」

シユンは警護の男たちに声をかけると、荷馬車の中を覗き込んだ。中には、恰幅の良い商人風の男が一人、がたがたと震えながらうずくまっていた。

「すいません」

声をかけるとびくつと飛び起き、シユンを見て、また固まった。

「何か拭くものお借りできますか？」

シユンがいうと、やっと意味を理解したのか、柔らかそうなタオル大の布を何枚かくれた。

シユンはそれで顔をぬぐったが、なかなか血糊が拭えないので、やむを得ずサラの手を引きながら河原に降りていった。

川で手を洗い、顔を洗うと、やっと人心地つけたシユンは、そのまま布を水に浸すと、サラを石に腰掛けさせ、顔と手をぬぐってあげた。

「サラさん？大丈夫ですか？」

「え？うん」

サラはまだ心ここにあらずといった呆然自失の状態だった。

シユンは、サラの手から剣をはぎ取ると、濡れた布で血糊を拭き取り、乾いた布でから拭きして、サラの腰の鞘に収めた。

そして、サラの顔を胸に抱きしめて、そつと耳元でささやいた。

「サラさん、終わりましたよ。もう大丈夫です」

サラはなにも答えず、ただシュンの腰を力一杯抱きしめた。

「なあ、あの二人何者だろう？」

助けられた男たちのうち、右側にいた若干若い男が、左の大柄な年配者に小声で話しかけた。

「わからん」

大柄な男は、食い入るように見つめていながら、興味なさそうな声色で素っ気なく答えた。

「装備も腕も半端じゃない。だのにはあれば、初陣のあとの新米みたいな……」

「わからん」

今度は明らかに不快感を漂わせながら、大柄な男は若者に振り返りいった。

「なににせよ、俺らに取っっちゃあ、命の恩人だ」

その様子は、街からも見えていたのだろう。

やがてしばらくすると、街の護衛らしき男たちが20人ほど、連れだつてこちらに駆けてきた。

彼らに紛れ、シュンとサラもゆっくり街のほうに歩みを進める。

ひどい手傷だが、御者の男もなんとか命を取り留めたようで、今は馬車に運ばれ、揺られながら街に向かっている。

「おまえさんたち、何者なんだ？」

街から駆けつけた男たちのリーダーらしき貫禄のある男が、シュンに尋ねた。

「あの腕前はすさまじい。なににせよ助かった、礼を言う」

シュンは曖昧に笑いながらその礼にうなずき返した。

「すみませんが、とにかく体を清めたいし、休みたいんです。今日は朝からなにも食べてませんし、一日歩き通しで疲れてるんです」
シユンは、並ぶと頭ひとつも高いサラの肩を抱きながら、リーダー風の男にいった。

「任せてくれ。宿と食事、風呂の手配は俺たちです。おれはガイラス。おまえらの名前を聞いていいか？」

「僕はシユン。こっちは、サラです」

「格好からすると冒険者か？」

「訳あって旅してます。特に冒険者というわけでもないんですが」「そうか。とにかく歓迎する。旅といったが、やはり王都を目指してるのか？」

「ええ、まあそうですね。急ぐ旅でもないのですが」

勝手がわからないので、シユンものらりくらりと歯切れが悪い。

「ならゆっくりしてってくれ。ようこそ、レリウの街へ」

レリウは、小振りながらしっかりとした外郭を持つ都市だった。

人口はさほど多くはなさそうなものの、暮らしぶりからそこそこの地力があるようにも見える。

シユンもサラも、この世界においては一財産というにふさわしい金銀を持っているので、金の面での不安は、多分さほどないだろう。反対に、それらを狙われる方がよほど恐ろしい。

まあとにかく、ここの、この世界の様子をしばらく学ばねばならない。

シユンは、まだ茫然と竦んだままのサラの肩を抱く手に力をこめ、ガイラスの招きに応じ、街の中心近くにある一軒の宿屋へと向かっていった。

ガイラスの顔なじみらしい宿の女将が、シユンとサラの血まみれの姿に一瞬肝を冷やしながらも、すぐに事情を悟ったか、風呂のお

湯を用意しに走り回った。

女将に、誰かサラの入浴の介添えを、と頼むと、何を心得たのか、「任せておきな。こう見えてもあたしは若い頃、エルナー様のお屋敷に奉公に上がってたんだ」と大きな胸を叩いて見せた。

サラの容姿と出で立ちから、女将は、サラがやんごとなきご身分だとも思ったのだろうか。まあ問題になる誤解でもないので放っておく。

金はいくらかとシユンが聞くと、

「まあ今日のところは奢おごられてくれ」

とガイラスが大きな口を開けて笑った。

人間、現金なもので、風呂に入り、身なりを整え、食事をすると胸にわだかまった嫌悪感より、疲労と眠気が勝っていく。

入浴中の様子を女将に聴き、また、先ほどの食事の様子を見ていたシユンは、サラがかなり参っている事をひしひしと感じた。

「サラさん、じゃあお休みなさい。なんかあつたら隣にいますから」シユンはそう声をかけると、自室に戻った。

サラの精神がダメージを受けるのはわかる。

正直、シユンにとつても先刻さうきのあれは正直、堪こたえた。

手に伝わる肉を切る感覚。噴き出す血。生暖かいそれが自分の顔に、服に、手にこびりつく。さらに、あの血と臓物の匂い。

魔獣ゴリンとはいえ、生き物の死にもぐるいの叫びと、断末魔のうめき。

寝るしかないな。シユンは布団の中で苦笑する。

ふと違和感を覚えて眼を開ける。

陽が落ちてからもどこかしら喧噪の絶えなかったレリウの街も、ようやく寝静まっているようだ。

自分の布団の右側に誰かがいるのに気がついて顔を向ける。

そこには、しどけない寝顔をしたサラがいた。

どうしたんだろう。怖くて一人で寝られなかったのだろうか？

ただ、シユンも今日はさすがに限界だった。

空腹と疲労、そして緊張。

それらから解放された肉体は、思考さえ許さないほどシユンの意識を睡眠へと引きずり落とす。

あれから街までずっとそうしていたように、せめて、サラの肩を

抱いてあげよう。

再びシユンは、深い眠りへと戻っていった。

「おや、夕べはお楽しみでしたかね」

「……それどころじゃありませんでしたよ」

にやりと笑う女将に起こされ、シユンはゆらゆらと起き上がる。

まだ布団では、サラが寝息を立てている。

「ガイラスとグレイズが下に來てるよ。あんたに話があるようだが、後にさせるかい？」

「グレイズ？」

「ああ、あんたが昨日助けた商人だよ」

「ああ……着替えるから待ってもらっていいですか？」

「あいよ」

女将は、水を張った洗い桶に新しいタオルを置いて出て行った。

シユンは、昨日洗濯を頼んでまだ帰ってこない羽織袴の変わりに別の羽織袴で身なりを整え、洗い桶で顔をすすぐと階下に降りていった。

「おはよう、シユン」

ガイラスが、一階の食堂風になっている広間のテーブルに腰掛け、シユンに声をかけた。

「おはようございます、ガイラスさん」

「おはようございます、昨日は危ないところをお助けいただき、誠にありがとうございます」

例の恰幅のいい商人、女将がグレイズと呼んでいた男が、おずおずとシユンに声をかけた。

「いえ、たまたまですし、おかげで昨夜は私たちも助かりました」
半日以上無人の草原をふらつき、食うや食わずだった一日の終わり

にしては、非常に心地よい風呂と寝床だった。生き返った気がする。招かれるまま座り、シユンは、女将の心づくしの朝食を食べながら、二人の用件を聞くことにした。

「実は、シユンたちにグレイズと一緒に王都まで行ってもらいたいと思ってさ」

ガイラスはそう切り出した。

早い話が、昨日の立ち回りを見ての用心棒、ということらしいのだが、シユンは、サラの様子が気になってあまり気乗りがしなかった。

王都に行くのは心が惹かれるのだが、別に急ぐ旅でもないし、それよりゆっくりサラが心を落ち着かせてくれた方がよほどありがたい。

いち早くその表情を読み取ったグレイズが、困ったように目線でガイラスを促した。

「ここんところあまり魔物に出くわすこともなかったんだが、昨日のあの騒ぎでさ」

こいつがひどく不安がってるんだ。とガイラスはいう。

「それに、あんたらももし王都を目指すんだったら、一石二鳥じゃないかと思ってな」

まあ確かにそれはその通りなのだが。

「それはそうなんです、僕たちも誰かと約束があるわけではありませんし、サラの調子が戻るまで、ここで休んでいたい気もするんですよ」

すると、今まで黙り込んでいたグレイズが、こちらを窺いながら話し出した。

「で、でしたら、シユンさんだけでもいかがでしょう?」

グレイズがいうには、普段であれば、街の警備の若いのが数人で、充分まかなえる護衛なのだという。

だが、昨日、ここいらでは数十年ぶりになるゴブリンの集団での奇襲に遭い、グレイズも、護衛の面子も肝をつぶしているのだという。

だが、人口もそれなりにあり、人の往来も活発なレリウにとっては、物流の停滞は非常にづらい。

そこで、シュンやサラといった凄腕の冒険者が滞在している今、ガイラスにもう1台馬車を仕切ってもらい、2台で王都まで大量に必需品を買い出しに行きたい。

というのがグレイズとガイラスの考えらしい。

「出立の予定はいつですか？」

「明日、あるいは出来るだけ早い方がいいのです」

少し相談します。シュンは告げると、それっきり黙って食事をした。

さすがにおなかが空いたのか、サラは昼前にやっと起き出してきた。

どうやら確信犯だったらしく、シュンの布団に潜り込んだことは全くノータッチだった。

だったら、明日から同室でもいいかな、とシュンは思う。

とりあえず、1階のフロアのテーブルで、サラの食事が終わったあと、先ほどのガイラスたちの頼み事をサラに相談してみた。

「また、昨日みたいな事になるのかしら」

サラの口調は静かだったものの、明らかに気乗りがしないことは明白だった。

「じゃあ、僕一人で行ってみようか？どちらにせよ一度王都ってところの様子は見たいし。サラさんはその間、ここでゆっくり街とかを見ていてくれればどうかな」

「えっ……」

「片道10日くらいかかるかも知れないみたいなお話だったから、ま

あ20日くらいしたら帰ってこられると思うけど、いいかな？」
「……」

サラはうつむいてしまい、なにも話さなくなってしまった。

「とりあえず、気分転換に買い物に行きませんか？」

シユンが提案してみる。

「買い物？」

サラがあまり気乗りしないような口調で返すと、シユンは小声でサラに耳打ちした。

「下着、とか」

サラは真っ赤になりながらうなずいた。

小振りながらも、レリウの街は活気のある良い街だった。

縫製の技術はあまり良くないのか、服や肌着のたぐいはデザインも機能性も良くなかったが、二人ともそうした手持ちが全くなかった。ここで10着以上のストックを買いそろえた。

そもそも、VRMMOの世界では、全くと言っていいほど下着の必要がないために、アイテムとして一切持っていないのだ。

シユンがサラにいったら即理解していたので女性用もそうなんだろうが、とにかく、パンツにゴムが使われていないために、使い勝手というか履き心地がひどく悪い。

裁断も、おそらく立体裁断になっていないのだろう。上着に干渉してごわごわした肌触りなのが残念だ、とシユンは思った。

だがまあ、ないよりはマシなのである。

その後、武器屋や防具屋を見て回った後、まだ少し早いが、二人は宿に引き返した。

武器や防具は、めばしいものがなかった。そもそも二人は、この世界の常識からいったら非常に高性能な品々を大量にストックしているから、まああらためて買いたいと思えるほどの品がなかった

というのが本音であろう。

シユンたちは宿屋に戻り、女將に

「今日から相部屋にしたい」

と告げると、女將はすぐに了承した。

ベッドはツインがあったので、そうしてもらった。

料金のことを聞くと、ガイラスが払うと行って帰ったとのことで、価格のことを聞いても女將は答えようとしなかった。

あまり世話になるのは居心地が悪いので、シユンとしては本当は自腹で泊まりたかったのだが、やむを得ないだろう。

二人がそれぞれの部屋から移動をしているとき、女將がサラを呼び止めた。

「ねえあなた、凄腕なんだったねえ」

「……なんでしょうか？」

「一瞬でゴブリンを10匹くらいばっさばっさ斬っちまうんだってね」

「……」

「うらやましいねえ」

サラは、カチンと来たのだろう。女將をにらむと、小声で吐き捨てるように言った。

「何がうらやましいんですか」

「うらやましいさ。あなたはその腕であの坊やを守れるんだからねいままでの、サラをからかうような口調から一転し、女將はしみじみと言った。

「あんたちよつと下においで。お茶でも飲んで話そう」

「あれ、どこに行くんですか？」

「女同士の話だよ。あんたは部屋でも片付けておいで」

サラと女将は、一回のカウンター奥にある厨房のテーブルに腰掛けた。

サラにお茶を勧めると、自分も軽くお茶をすすって、女将は話し始めた。

「もう20年になるかね。あたしの旦那も、よく頼まれちゃ護衛の仕事をしてたのさ。」

「だけどある日、あんたらと同じように、ゴブリンの大群に出くわしちまってさ」

死体はひどい有様だったらしい。

街の人間たちが大挙して搜索に出たものの、馬と荷は奪われ、4人分の死体が散乱していた。

「うちのなんか、頭と足がなくなってたし、いくら探しても見つからなかったねえ。」

内臓もすっかりなくなつて、ぽっかり穴があいてるようだったよ。食われちまったか、どうしたもんか」

そこで女将は、サラをじっと見つめた。

「あんたは、そういう奴らと戦ってるんだ。あの日、あんたらがいなければ、あいつらは、奴らにそうされてただろうさ」

「……」

サラには、とっさに返す言葉が浮かばなかった。

「あたしにあなたの腕があったなら、亭主を一人で行かせたりしなかつたらうね」

そういうと、女将は自分の茶碗を流し場ですすぎ、勝手口から表に出て行った。

夕食の時間になると、再びガイラスとグレイズが宿屋を訪ねてきた。

シユンとサラを交え四人で夕食を摂りながら、明日以降の予定を話したいようだ。

「僕も王都へ行ってみたいですし、とりあえず一緒にしようと思います」

シユンはそういうと、サラを窺った。

「私も、行きます」

何があつたのか、サラはずいぶんあっさりと言った。

シユンは、不思議に思いながらも、心の底ではサラの変化を喜んでいた。

やはり、20日以上も離れるのは心配だし、なんといっても、淋しいのだ。

どんな理由はわからないが、こんな世界に突然放り出された二人だから、どこかしら共鳴している部分があるとシユンは感じている。だからこそ、出来る限り常に一緒に行動したい、とは思いつつ、でも、まだそうサラに頼むことが出来ない歯がゆさも、シユンは抱えていた。

ガイラスとグレイズはとても喜んで帰った。

明日からは、二人にとって、新しい冒険が待っている。

翌朝目覚めると、サラはまたシユンのベッドに潜り込んでいた。

洗い桶に水を張って持ってきた女将に

「夕べはお楽しみでしたかね？」

と聞かれて、シユンは

「はいはい……」

と答えた。

ガイラスとグレイズはすでに宿屋に来ていたので、サラとシユンでテーブルを囲み、朝食を済ませた。

別のテーブルには見覚えのある護衛が二人。そして初顔合わせになる護衛も二人。

つまり、ここにいる八人が、今回の道行きの顔ぶれということだろう。

食事が終わった後、早速二台の馬車に分乗し、王都への旅がスタートした。

王都へは、このまま川沿いの道を東に下り、5日ほど行ったところにあるライダンという都市から南東に進むようだ。

このコースの良いところは、なんとといっても片道10日間、野宿が一度もないということだ。

いうまでもないことだが、野宿せねばならない道のりというのは、それだけでさまざまなリスクを抱えることになる。

夜盗、野獣、魔獣に、もちろん自然現象さえ。

だから、一見遠回りに見えても、一度ライダンまで出るコースを必ず取る、とグレイズはいった。

それはおそらく、とても賢い判断なのだろう。シユンは思った。

第一、野宿はリスクだけではない。疲労も大きいのだ。

旅においては、疲労も重要な課題になる。

疲れているとまず、ミスが多くなり、集中を欠くようになり、理性より感情で物事を判断するようになり、そして体調を崩しやすくなる。

おそらく、商人としてはそのどれもが致命的な失敗につながり得るだろう。

見た目はちょっとだらしないが、このグレイズという男、これで見直した商人かも知れない。と、シユンはちょっと彼を見直

していた。

ガイラスとグレイズという、この世界の二人の大人とよく話す機会を得られたのは、サラとシユンにとって非常に有益だった。

ガイラスは冒険者、グレイズは商人という立場で話してくれるというのもとても参考になった。

そして、サラもシユンも、この世界では相当な「強者」であるということもわかった。

「まず、あのレベルでゴブリンを蹂躪できるというのは、王家直属の騎士や、教会の聖騎士でもどれほどいるか」

ガイラスはいった。

「最初の一撃で何匹か狩り上げるといっのはまあ脅力じょうりょくがあれば誰だつてやりうるけどな。あんたらは、たった二人で何十匹のゴブリンを駆逐したんだ」

「全滅させたんじゃないなくて向こうが逃げ出したんですけどね」

なんだか持ち上げられてるような感じになってシユンは苦笑した。

まあいずれにせよ、MMO的世界の中でいったら、プレイヤーキヤラ的な強い存在はあまり多くない、ということだろう。実際問題、あんなのがごろごろ居るRPG世界というのは、ちょっと異常なのかもわからない。

それにしても、あの光の玉にはじめにいわれてはいたが、本当にこの世界は、リアルだとシユンは思った。

NPCとかモブとか呼ばれる存在が、一人一人意志を持って動いている。

それは、シユンやサラにとっては、気の紛れにはなるが。

サラにとっては、ここ数日の旅程は、こんな世界に巻き込まれた自分に『納得』させるための良い機会になった。

あの宿屋の女将の言葉は、確かな衝撃となつて、サラを襲った。ただの近所の少年だったシユンと二人つきり、なぜこの世界に放り投げられたのかはわからない。

だが、もし シユンがいなかったら。

サラは、見た目は頼りないこの少年のことを考える。

2コも年下で、自分より背も低くて、18歳になるのにどこか幼さがあつて、なのに『かなり』自分よりしっかりしている。

宿屋の女将の言葉で自分が戦慄したのは、

「もし、シユン一人行かせて、帰ってこなかったら？」
という事だった。

初戦の様子を見る限り、確かにシユンはかなりの使い手だろうと思つ。

だが、寝込みを襲われたり、だまし討ちを食らえば、どんなに優れた者でも、容易に命を落とすだろう。

自分が彼と共にいない状況で、もし彼が死んだら、自分はそれに耐えられるだろうか？

ここ数日、サラはシユンに甘え、夜中に彼のベッドに潜り込んでいる。

彼がそばにいないければ息苦しいほどに依存しているのだ。

それは精神的な依存であつて、おそらくまだ恋愛感情ではない。

本当にそうだろうか？

彼がこの世界の他の女に、もし恋をしたら。自分と行動を共にしなくなつたら？

自分はそれに耐えられるだろうか。

それにしてもシユンは、ベッドに潜り込んだ私にいくらでも手を出すチャンスがあるというのに、まったく手を出そうとしない。

それどころか、幼い娘をあやす父親であるかのように、ただ優しく肩を抱いてきたりする。

それがうれしい反面、腹立たしくもある。

この少年は自分に全く、魅力を感じていないのだろうか？

サラは、シユンの気持ちを測りかねて少しいらだつてもいる。

だが、この点ではサラも女性としてまだ成熟しきっていないのだらう。

シユンは、無意識であるにせよ、サラのこの行動 自分の布団に潜り込んでくることの真意を理解しているのだ。

だから、双方がはつきりと恋愛感情を成立させない限り、シユンがサラを女として抱く日はこないだらう。

シユンは無意識に恐れているのだ。サラと一時の気まぐれで男女の仲になったとしても、その後、つまらないいざこざで、彼女との関係が壊れることを。

穏やかだった旅に暗雲が立ちこめたのは、4日目の午後だった。

昼食を摂るために馬車を止め、護衛たちが火をおこし炊事をはじめた時に、シユンが、前方右側の森の気配に気がついた。

「ガイラスさん、サラさん」

火のそばに座る二人にさりげなく近づき、シユンは、その変化を告げた。

「囲まれています」

グレイズの馬車には今、王都で売るためにレリウで仕入れた特産品が満載されている。

その一部は、途中の経由地で売却し、代わりに商品を詰め込んだりしているが、多くは、レリウの産業である乳製品や加工肉などの食料品や皮、布などだ。

つまり、魔獣にとっては、食欲をそそる香りを常に漂わせながら

獲物たちが歩いていることになる。

だが、彼らにとって、何日か前に起きた衝撃を引き起こした『人間』がそこにいることが、ここまで彼らを襲えない理由だった。

そこで、彼らは再び数に頼ることにした。

さらに彼らは『知性』に勝る仲間を引き入れることにも成功した。オークという。魔法も使え、知恵も人間に引けをとらず、そして戦闘力では人間以上の存在を。

オークは、ゴブリンの獲物が、通常の倍にも当たる物資を積み込んで旅をしている事を見抜いていた。

おそらく、よほど警護に自信があるのだろう。

だが、数日様子を窺っていたが、一行ははずか8人。

こちらには、魔法が使えるオーク5人。それぞれが魔法のほか、弓や剣も使える。

この5人でも、あの8人を蹂躪しきれのではないかとオークは踏んだ。

さらに、1000匹を超えるゴブリンが集まっていた。

この先、ライダンを超えると、人間たちの軍隊が存在する。だが、ここで襲えば、決着が付く前にライダンから人間どもが駆けつけることは無理だろう。

オークは、襲撃を決意し、まずゴブリンに前後をふさぐことを指示した。

そして、ほかの4匹のオークに作戦を与えた。

「前後を囲まれてる。ゴブリンだな。えらい数だ」
ガイラスはいった。

護衛の男たちに火を始末させ、グレイズを馬車に避難させる。

「さて、どう戦おうか」

ガイラスは、シユンを見た。
「殲滅するしかありませんね」

シユンはため息混じりにいった。

「馬車ではたぶん突破は難しいでしょう。」

ならば、まず行く手をふさいでるゴブリンを殲滅して、そのあと馬車を進めながら後ろから来るゴブリンを防ぎながら、ライダンに向かうしかないでしょう。」

「そうだな」

「ライダンにはあてになる戦力はあるんですか？」

「こつちの異常に気がつけば、100人近い兵は出せるだろう。だが、来るまでにはかなり時間がかかる」

こちらの護衛のうち、二人には馬車の御者をしてもらわねばならない。

もう二人は、前後で先走りのゴブリンの始末をしてもらうとして、左右に残すのは、サラとガイラスになるだろう。

とすると。

「ガイラスさんとサラは左右で馬車を守ってください。前後には一人ずつ。馬車はいつでも走れるよう、御者を付けて待機してください」

「わかった」

「サラさん、だいじょうぶ？」

「もちろん。私も一緒にいなくていいの？」

「僕の殲滅が遅れたら、後ろから来るゴブリンが間に合わない。だからサラさんお願い」

「わかった」

「ガイラスさんは極力、馬車の周囲を離れないでください。前が片付いたら馬車に乗ってください」

「おう、たのむ」

「じゃあ、行きましようか」

シユウは、腰に刀を差したまま、ステータスを開いて、一降りの長刀を取り出した。

その光景を、ガイラスは茫然と見た。

「な、なんだそりゃ……」

シュンが取り出したのは、刃渡りが2メートルもある長刀。斬馬刀だ。

見た目こそ美しい日本刀のそれだが、刃渡りに加え、柄の部分も1メートル近くあるそれは、禍々しさまがまがさえ漂う銀光を放って、見るものに存在感を与える。

抜いた鞘だけをアイテムガジェットに戻し、シュンは数歩前方に進み、斬馬刀の峰を右肩に乗せて担いだ。

ガイラスはサラに、茫然とじつじつ尋ねた。

「おい、今あれどっから出したんだ？」

サラは、この世界にアイテムガジェットなどというものは存在しないことを知らない。その質問の意図がわからなかったので、答える代わりに、自分の持ち場に歩き出した。

「なんだか、本当にすげえな」

ガイラスは、理解することをあきらめ、自分の腰にある両手剣を鞘から引き抜いた。

シュンは、前方にゴブリンの大群　　およそ50匹　　が集結するのを歩きながら待った。

そして、完全に街道を阻む形で包囲を完成したゴブリンに向かって、一気に駆けだした。

足に履く早足の靴が、人間離れた速度をシュンに与える。

ゴブリンたちが一瞬、虚を突かれた瞬間。肩に乗せていた斬馬刀を右下段に持ち替え、シュンは、立ち止まった。

止まった慣性を一気に刀に乗せ、シュンは斬馬刀を横薙ぎに振り切った。

間合いに入ろうとした周囲のゴブリンが10数体、その一閃で肉塊と化した。

左に振り切った斬馬刀を返し、シュンは左手の一群に向かって走

った。

粗末な武器を手にしたゴブリンたちは、一瞬で目の前の光景に恐慌した。

浮き足だった左翼のゴブリン20体ほどを、シユンは斬馬刀で刈り取る。

右翼のゴブリンはすでに潰走をはじめている。

ズシャ。

その瞬間、激しい殺気がシユンを襲った。

ほんの一瞬よけきれず、痛みが脳髄まで駆け上がった。

「ぐっ」

とつさに右手で脇腹をさわると、服が裂け、皮膚にも一閃の切り傷が付いていることに気がついた。

「魔法使いがいるぞ！」

シユンは50メートルほど後方の仲間にも叫んだ。

「オークだ！」

前の馬車の御者をしている護衛が悲鳴を上げた。

「くそつ。最悪だ」

魔法を使うオーク。それはもはや、商隊の護衛風情が立ち会える相手ではなかった。

王軍の騎士や魔術師が一軍を編成して戦うべき相手である。

ガイラスは、全滅を覚悟した。

「ガイラスさん、サラさん、馬車に乗って！」

シユンは斬馬刀をアイテムガジェットに放り込み馬車に駆け寄り、指示を出した。

前後を守っていた護衛も馬車に乗せ、御者の二人に馬車を出すよう命じた。

「サラ、二台の馬車にレジスト出来る？」

「大丈夫！」

「じゃあお願い」

後ろの馬車の御者台にサラを乗せると、シユンは一人その場に残った。

背後から襲いかかろうと駆けだしたゴブリンの一群を殲滅するため、再びアイテムガジェットから斬馬刀を取り出す。

オークたちは、目の前で起こった戦闘を、啞然と見守っていた。だが、馬車が逃げはじめたことですぐに正気を取り戻した。馬車を止めるなら、馬を殺すのが手っ取り早い。

前方に二手に分かれた4匹のオークたちは、自分たちに向かってくる馬車の馬めがけ、<ウインド・カッター>や<ファイア・ボール>の呪文を唱えた。

だが……。

サラはすでに、<レジスト>を完成させていた。

前方から飛んでくる<ファイア・ボール>と<ウインド・カッター>を見て、ガイラスは、あと数瞬で自分が死ぬことを理解した。隣で御者をする護衛の男も同様に、あきらめに似たため息を漏らしていた。

しかし、目の前でそれらの攻撃魔法が、障壁に当たって碎けるのを二人の男は見た。

レジストされた自らの魔法を見て、4匹のオークは冷静さを失った。

自らの限界まで、彼らはさらなる攻撃魔法を紡ぎ出した。

馬車の周囲は、乱れ飛ぶ魔法とそれが碎ける残滓ざんじで、輝くほどきらめいた。

恐怖で、馬たちはすくみ上がっていた。

その中を、サラが淡々と歩いていった。

ついに、4匹のオークの魔力が尽きた。

巻き上がる粉塵ふんじんと魔力が晴れると、美しい金髪の女が、自分たちに向かつてゆっくりと歩いてくるのが見えてきた。

オークたちは、今起こったことなど忘れ、あの女を征服したいという純粹な欲求に捕らわれた。

あの女を組み伏せ、征服し、陵辱し、所有したい。

光り輝く白銀のプレートメイル。

手には、魔力で金色に光り輝くロング・ボウ。

彼らが心の底から忌み嫌いつつ、しかし自分らに隷属させたいと心から欲する、あのエルフ族に似た人間の女。

オークたちは、腰の刀を抜くと、サラを捕獲しようと駆けだした。ほんの一瞬前の力量差など、もはや彼らの思考からは欠落していた。

50匹のゴブリンと1匹のオークは、戦鬼のように立っている一人の少年に殺到した。

あれを倒せば後はどうにでもなる。

みたところ、あの小僧だけがこの商隊の戦力なのだと、指揮するオークは直感していた。

ゴブリンたちが奴を組み伏せたら、それらごとく破砕してくれる。

オークは、魔法の準備をしつつ、その瞬間を待った。

50匹のゴブリンたちは、無秩序にただ一点。シユンに群がった。だが、ただ一匹としてシユンに触ることは叶わなかった。

シユンは、右足を軸に、斬馬刀を横薙ぎにして数回、回転した。

その瞬間、残ったオークは、<ファイア・ボール>と<ウインド・カッター>を、その光景の中心に向かつて、全勢力で交互に打ち続

けた。

周囲に積み重なったゴブリンの残骸は、それらの魔法でなおも粉碎され、一帯は血潮と肉片で赤黒く染まっっていく。

流れるように自然な所作で、右手側の2体のオークの頭を、サラは射抜いていた。

サラの手にしたロング・ボウは、炎の祝福を持ったもので、射た矢が敵に当たると、ファイアボールと同等の魔法を発揮する。

サラに射抜かれたオークの頭は爆砕し、頭を失った体はそのまま崩れ落ちた。

左手の2体は、その隙に一気に駆け出し弓の間合いの内側に入り、両サイドからサラを捕らえにかかった。

サラは惜しげもなく弓を投げ捨て、腰の剣を引き抜き、迫るオークたちを呆気なく斬り伏せた。

シュツ。

剣を振り血糊を払い、足下の弓を拾い上げると、サラは馬車のほうに戻っていった。

魔法を打ち終わった瞬間、オークは、一瞬上空に黒い影を見た。

そして、それが、オークの知覚したこの世の最後の光景だった。

右手に刀を、左手に脇差を握ったシュンが、5メートル近い距離を一足で跳躍し、3メートルほど上から一気にオークを斬り伏せた。オークの放った火と風の魔法は、このふた振りの刃に施されたそれぞれの祝福によって、すべて切り捨てられていたのだ。

ゴブリンの肉塊を体に浴び、眼だけが白い赤黒い姿のシュンは、刀を払うと鞘に戻し、やっとアイテムガジェットからタオルを取り

出し、顔に付いた肉片と血糊を拭き取っていった。

逃げ出したほんのわずかなゴブリンを除き、90以上の魔物が、
たった二人の人間によって壊滅した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7503y/>

レジナレス・ワールド

2011年11月23日12時52分発行